



Title	京都北白川に源先生をお訪ねして
Author(s)	
Citation	懐徳. 1966, 37, p. 135-142
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/90437">https://hdl.handle.net/11094/90437</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 京都北白川に源先生をお訪ねして

昭和四十一年五月三日

出席者 酒井 藤塚 山口 桐本

その朝は清水寺の忠僕茶屋に、西村天囚先生の筆による看板を見せて頂いたり、特に懇望して成就院のあの清

らかな庭園を拜見させて頂いたりした。

午後源先生のお宅を訪れる。

閑寂な書齋で温顔の源豊宗先生に懐徳堂重建五十年に當り、その思出をお伺いすべく參上した旨を述べる。書

齋のお庭は折からの五月雨で、一入綠濃やかにすがすがしい爽かさを覚えた。

憶というものがだんだん薄くなつて、この頃もう人の名前も仲々思い出せないですヨ。

藤塚 私もモノをよく忘れるようになります。

先生 何ですか懐徳堂は今もなおズット續けておいでになりますか。

酒井 ハイ毎年春秋二回の講座と見學會をやつております。

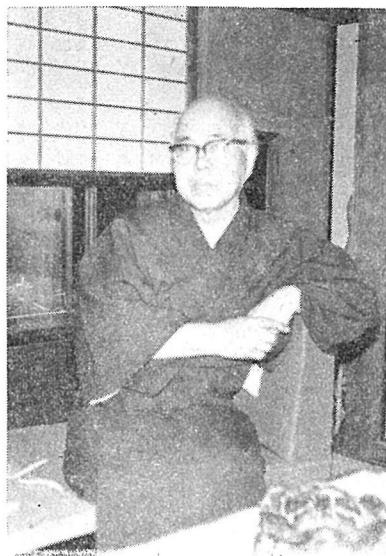
藤塚 また先生にもお願ひしたいと思つています。先

生 夏ごろはお忙しうござりますか、七八月ごろ。

先生 ソウデスネ、今豫定が決つていないですけれど、或は私その頃にはこちらに居ないかも知れません。

酒井 アメリカですか。

先生 まだそこは何とも判りません。何か御計畫ですか。



源 豊 宗 先 生

京都北白川に源先生をお訪ねして

藤塚 見學會でござります。香港の方へ……

先生 今もつてつづけられているとして、あの頃の人達はまだ残つておいでですか。

桐本 先日思出話を承るため圓珠庵で七八名集つていたゞきました。

酒井 次第に旅行なさいます。

先生 遠行ですネ。しかし新らしい人も出来てくるわけですね。今懷德堂といふものの組織の背景はどこがやつておられますか。

藤塚 今は昔のように寄付なんかも集りませんし、主に住友さん關係の會社、十五六社さんが交替で毎年いくらかづゝいたゞいております。マアどうかこうか運營いたしております。

先生 小倉さんの緣故ですね。

藤塚 今度は五十週年になりますのでこの機会に何とか各方面の御援助を願うつもりでござります。

先生 アア云う毎週の定例講義、定例といふのでなくて、私達が行つていましたのは何というんですか。

酒井 定期講演と申します。

先生 アア云う定期講演は、今やつておられませんネ。

今は年に二回位一週間かそこら、いつか私も参りました。酒井 懷德堂講座としてやっております。

先生 以前のような講堂がないのですからネ。藤塚 先生がおいで下さったアノ頃が、懷德堂として一番盛んな時でございましたようです。

先生 そうですか。

酒井 聽講者も多うございました。

先生 恐らくあれが最後位いでないですか。私の記憶があるのは講義に行つてですネ、歸りに灯火管制でネ、眞暗になつてしまつてネ、自動車もつかまらないし、随分町角で待つて、やつとつかまえて歸つたということでした。

酒井 昭和十六年か。

先生 昭和十九秋かもとあとだつたか。

藤塚 あの頃、先生がおいで下さつていた時分の聽講者の態度といふうなものを、先生はいかにお感じになりましたでしようか。

先生 懐德堂といふますとネ、私が京都大學の最初の史學科にはいつた頃、國史の先生に内田銀藏という方が講義の代りに懷德堂で講義された近世の日本という講義を出版され、その書物を今言はゞ教科書のようにして話されましたであります。

先生 私その時の印象ではとにかく吾々の大學の先生が懷德堂へ行つてアア云う講義をされたといふので、懷德堂の講演といふものは非常に權威があるも

のと思いました。

事實そうでした。

確かに桑原先生も行つておいでになりました。マア懐德堂の講義といふものは吾々學生は勿論ですが、恐らく大學の先生達でも懐德堂へ行つて講演するということは一つのマニア光榮と思っておられたと思います。私は

酒井 皆さん夕方からでした。



源先生の書齋の額（内藤湖南先生筆）

等もその書物を読みながら懐德堂の講義といふものは素晴らしいものだと思つていました。そして私は何年頃でしたか、昭和十年を超えていると思ひます。私が講演をたのまれた時は實際意外でしたし光榮にも思ひました。

酒井 その時の御講義は何でございましたか。

先生 日本美術史で、恐らく最初佛像の話からしたと思います。幻燈を持って行つて……その時分のスライドというのは大きなガラス板でしてね、隨分重いものを持

つて行つたんですよ。懐德堂の映寫機は仲々立派でして、よく寫りました。他の先生方も夜の講演でしたか。

酒井 皆さん夕方からでした。

先生 そうですか。ともかく行きますと、まあそこの控室で辯當が出まして、あれも私、思出になります。どこからとられるのか仲々ご馳走でした。しかしマヨ。あの頃から美術といふものに一般の興味が高まつてきました。ですから割合私の講義にはたくさん見えていました。そしてアレ和歌山あたりからも来ておられました。そしてアレ和歌山あたりからも来ておられました。ともかくその聽講者の態度などほんとうに皆熱心でしたね。別に試験をしないからどれほどとは判りませんけれど。

桐本 私あれはきかせて頂きました。スライドの印象も残っています。藤塚さんが幻燈係りで。

藤塚 あの機械はまだ残っています、使つていませんけれど。

先生 古物ですね。

藤塚 もうレンズが曇つています。磨かんといけませんが、あれは便利でした。

先生 あの時は一週間に二回あつたのと違いますか。

藤塚 一週一回で交替ですから隔回でした。先生には随分永くお願いいたしました。

先生　たしか天沼先生も丁度行つておられましたね、澤渦先生も。私は何年位いやつたでしよう。アレはズーツと續けたか、或は一年か二年休んでやりましたか、とにかく永い間私は行つた記憶があります。

桐本　中村先生の古文書はそのあとですか。  
藤塚　あれはズット前です。

先生　講義はなんですか、文學關係のほかに法學の講義もあつたんじやないですか。

藤塚　月一回日曜日にソレは晝ありました。法學部、經濟學部の先生方におねがいしました。

先生　あの當時講義をした先生方で現在おられる方は少ないんじやないですか。中村さん、澤渦さん、私……

酒井　佛教の講義をされました羽溪先生、新村先生も……。

先生　新村先生はズット早いんじやないですか。

藤塚　大分前でした。

先生　五十年といいますと大正五、六年で、西村天因先生は。

酒井　西村先生は八年頃に東京へおいでになりました。

先生　私はネ、西村天因先生はハッキリした記憶はないですけれど、アノ背の高い大きな體を大學でチラト見

た覚えがあるのです。西村先生が亡くなられたのはいつごろですか。

藤塚　大正十二年か十三年です。實は今日、西村先生がお書きになつた看板が清水寺の甘酒茶屋にあるのを見て参りました。舟板で造られたもので御座います。アソコの主人というのが月照の下男をしていたもので大槻重助さん。ソノ後ズットつゞいて、現在忠僕茶屋と云っています。

先生　忠僕茶屋、今ありますね。

藤塚　盛んにやつています。先日もアソコへ話を伺いに参り、今日もまた寄つきました。

先生　誰れかそこに天因先生を知つて居る人は居りましたか。

酒井　いや居りません。

先生　藤塚さんは懷德堂の第一期からご存じですか。

藤塚　イエ私が懷德堂へきましたのは大正十二年です。

先生　ソレまでは……。

藤塚　吉田先生の他に矢壁という人が居りました。ソレでその人がやめて、吉田先生が私に來んかと云はれまして……。結局前に居つたところでジット辛棒していたらよかつたかも知れません。

先生 その頃は吉田さんは池田に居られたのですか。

酒井 そうです。

藤塚 私は吉田先生に速記を習いましたのです。その関係で懐徳堂で講演があつたら、それを速記して出版するということでした。

先生 それはどつちがいいかわかりませんヨ。藤塚さんは今もって斯うして文化の仕事にズット携つておられるんだから、それはよかったですヨ。ソリヤ富豪にはなれないでしようが懐徳堂の理想じやないです。

藤塚 昔の先生方の教えかも知れませんナ。

先生 しかしあの頃は女の方も澤山見えていました

ネ。

酒井 あの附近の濱池（醫師）さんの奥さん、それから大野（旅館の娘）さん、おばさんも來ていた。桑原直子さん、侍の娘でネ厳格な方でした。懐徳堂の最初の頃には昔の侍が多かつたですナ。薩摩の益満久之助さんの親籍の方とか、それから満洲警察の方、陸軍歩兵大佐といふやうな方。

先生 考えてみると大阪というところは大學が出來たのは隨分あとですが、町の學問というと京都より盛んだったのではないかと思います。私の見るところでは京都ではあゝ云うよくな町の學問をするところとか、或は町

の人達が學問をするために集つて、それを永くつゞけるというところはありませんネ。それはね、私の例で申しますと、私が丁度向うへ講義に行つていた頃で昭和十五年に、女の方で皆私に話をしてくれといふので、月に一度話をすると、その會が出来まして、その頃は村山リュウさんも居られました。それは金葉會と名前をつけました。私はその頃大阪は女專に毎週金曜日に講義を行つておりました。その會が今もつて續いていまして、もう今年で二十七年になります。ですからその中には亡くなられた杉道助さんの奥さんも居られ、その頃から今日まで來て居られます。あのグループの方は藤澤さんの講義をきいておられました。そのつゞくことは、學問に對する愛着とでもいうものが、大阪には何か流れているのじゃないかと思ひますヨ。中井竹山先生あゝ云う時代からの傳統というのがあるんじゃないですか。京都だって江戸時代から町には學問をするところが無かつたわけじゃないんですが、現在一般市民は學校教育が終ると學問するというのを忘れてしまふんじやないですか。そういう點で一種の大阪といふところの風格があるよう思います。

藤塚 京都では大阪のように講演會といふようなものを持つたのじゃないかと思います。私の見るところでは京都ではあゝ云うよくな町の學問をするところはありますか。

先生 ありませんネ。

藤塚

確か吉川先生が京都で懐徳堂の講演會をやつてくれとおっしゃったことがありました、経費の關係でやめになりました。

先生 吉川先生のような立派な方が中心になられたら京都でも立派なものが出来ると思います。しかし大阪でもそんなに時間はかかりません、小一時間そこそこで行けますから昔の懐徳堂までなら。

酒井 講堂が焼けたことは残念でした。焼けてなかつたらまだ細々ながらでも講義をつづけていたかも知れません。

先生 住友さんのような財的背景がそう豊かでなくても講堂があるとすれば出来ます。この頃住友さんなんか仲々熱心でね。今私頼まれてまだ行かないんですが、あそこの社員のため話をしてくれと、今交渉中で、來週から週一ペんづゝ十回講義か何かを。そう云うような熱心な人達が居られるんですから、懐徳堂に建物があれば復活したかも知れないと思いますね。

藤塚 住友各社の重役のうちで、隨分そう云う方面で熱心な方もおられます。

先生 この頃はネ、漢文というものは中學でんまり熱心に教えないでしよう。ですから大學へ入つても蘇東

坡ときいても知らないものがありますヨ。

酒井 それは無理もないやろナ。

先生 色んなことを詰め込まれるもんですから、そんなことは覚えてないんだけれど、私はネ新しい意味で、漢文というものは非常に面白い學問だと思います。日本人が漢文を忘れるというのは、日本文化に對する理解が出来ない、半減するでしよう。

桐本 漢文を読みこなせなかつたら、日本の文化に対する理解ができないです。

先生 それは本當です。今日日本外史で日本の歴史を知る必要はないにしても、昔の記録といふものは皆漢式で書いてあるんですからね。そしてそればかりでなく、文學として非常に價値が高いですから、今漢文學の講義というものがあつたら、私は案外聽衆が集るんじゃないかと思います。

桐本 春秋二回の講座でも相當熱心な方が集ります。先生 けれども矢張り連續して、例えは文章軌範でもいゝですよ、あゝいうものを讀む講義が欲しいですネ。

酒井 全くそうです。(お庭の方は雨足いよいよしげく、木々の葉がしきりに打たれている)。

藤塚 是非もう一度復活したいものと存じます。大阪では今あゝ云うものがなくなりまして、泊園書院もつぶ

れましたし、大鹽平八郎のあの洗心洞も。細々ながらで  
もやつているのは懷德堂だけです。

先生 今、木村さんが中心になつておられるのです

ね。

藤塚 ハイ、事業運営委員で、木村先生に色々大變お  
世話になつております。

先生 ともかくあゝ云う方が中心になつて、そして昔  
とは異いますから、新しい感覺で懷德堂を復活されたら、  
非常にいいだらうと思ひますネ。あの頃は住友以外、朝  
日新聞からも。

藤塚 朝日新聞は廣告を出して頂きます今でも。

先生 朝日の廣告は學問をしているものには、一つの  
光を感じさせましたヨ。しかし懷德堂が新しい學問の  
場として、意味ある仕事をしているということが理解さ  
れれば、案外援助をしてくれる人があるんじやないかと  
思ひます。たゞネ、第三者から見て昔の懷德堂がそのま  
ま延びて行くとのではなくて、今度はもう一つ新し  
い漢文學といふものの新時代の使命を自覺して、そうし  
てもう一ぺんあそこで復活するという風に理解されれば  
いいと思ひますネ。今後復活出来るとすれば、あの様な  
日本風なものでなくして、鐵筋コンクリート造の様なもの  
でもいいですヨ。

京都北白川に源先生をお訪ねして

桐本 現在一寸相談に集まるところもないのに、適塾  
を借りたりしております。

先生 どこです。

桐本 洪庵先生の舊宅で、あれは大阪の史蹟として、  
懷德堂記念會の事務所ということになつておりますが、  
もつと自由に使えるところが欲しいと思ひます。

先生 しかし前のものは場所は良かつたですね。大阪  
のまん中ですからネ。

藤塚 大阪府の土地でしたので戦災と同時に返しまし  
た。書庫も賣りました。

先生 書物は焼けなかつたんですか。

藤塚 殆んど助かりました。

先生 その書物などは。

藤塚 皆大阪大學へ寄贈しました。そして私がその整  
理をやつています。場所がないので整理が仲々はかどり  
ません。

酒井 早く建物が出来ればよいのですが。

先生 懐德堂では西洋史の先生が行かれたことはある  
んですか。京大の坂口先生、原先生など。

藤塚 坂口先生、原先生これらました。

先生 三浦先生も行かれましたか。

藤塚 エ三浦先生もお見えになりました。

酒井 三浦先生は二回位いお越し願つたと違います  
か。

先生 そういう記録があるんでしよう。

藤塚 記録が不、焼けたりなんかして。

先生 そう云うことでしたらこの際、懷德堂史を作るべきですね。ともかくまだ生き残っている人もあるんですね。二十數年もたつたんですから、段々歴史のかなたに消えて行きますヨ。あゝ云う見學會などはいつの頃からやつておいでですか。

酒井 松山先生のいらつしやつた時からあつたのですから、大正十年ごろからと思ひます。

先生 あなたは何年ごろから懷德堂に出入しておいでですか。  
酒井 出入は講義が始まつてからです。  
先生 そうですか、それでは五十年史ですね、驚くべきものですね。今おいくつです。

酒井 ハ……  
先生 その頃は二十臺ですか。  
酒井 なるか、ならぬかです。  
先生 藤塚さんは。

(松山先生以外には講師はなかつたこと、それから大阪というところ、町人の中でも色々な學問を好む人達に話が移り木村兼葭堂、篠崎小竹など話はそれからそれへとつゞき朝集つてきた忠僕茶屋のことから月照にまで及ぶ。時間も相當たつたが戸外の雨は一しきり激しくなる。雨やどりにと先生がすゝめられるまゝ書齋の扁額の内藤先生筆蹟に話が移る)。

先生 戊辰は昭和三年です。皆この意味をきかれるんですが。なんでも玄獎三藏の唐の頃、あちらへ行った僧に贈つた詩の中のものである由です。「舌を深して龍に授ける」講義をする對手が皆偉い人であるといふような意味だそうです。(それから雨中を先生にわざわざタクシー乗場までお送りいたゞき辭去した)。

一緒に過したということは。あなたは懷德堂の所員じやなかつたんですね。

酒井 聽講生でした。

先生 では第一回生です。大變なものですね。

桐本 野口幸雄さんを先生御存じですか。

先生 お顔を見れば思ひだしますが、名前だけでは。

酒井 野口さんも存命であれば當然第一回生です。

先生 隨分前から見學會をやつておられるが、その頃は誰がついて行かれました。